

第18回 大倭会文化講演会報告

やってみないと、わからない

与えられた環境で変化に対応

講師 木村勝男さん

昨年の十一月十二日、大倭会文化講演会で「生涯青春」ただ今、大学院生」と題した木村勝男さんのお話を聞く機会に恵まれた。プロフィールの中には「どん底の貧しさから出発して、逆境を糧にしなが、目を見張るような行動力と向上心で経営者としての成功をおさめられた」とあった。

どんな話が聞けるのか楽しみであると同時に、正直少し身構える気持ちもあったのだが、いきなり座禅の話をして「みなさん座っているのしんどいでしょ」という言葉。一瞬で心が和んだ。その上、やわらかな関西弁で落語を聞いているような語り口、どんな話に引き込まれていった。木村さんはよく「他の人と切り口が違う」と言われるそうだ。「与えられた環境を忠実に生きてきただけ」だそうだが、祖国が韓国で母国が日本という二つの文化から見る複眼思考が、商売をする上で良い知恵の出る源泉になっているらしい。

ご両親は、当時（昭和十四年）日本に併合されていた朝鮮で渡航証明を取り、出稼ぎのように日本にやってきた。昭和十五年、島根県美濃郡益田町（現・益田市）で長男として勝男さんは誕生。戦争が激化すると、父親の述家さんは徴用工として、米子や舞鶴の軍需工場に連れて行かれた。それに合わせて母親は近くの農家の離れを借りて住んだ。父親は休日になると工場から抜け出し、人目を忍んで母親と勝男さんに会いにきた。「その証拠に妹や弟が生れている」と笑う。

中学三年生の時、父親は結核で他界。「アボジが死んだら家族のことはお前がちゃんとするんだぞ」と遺言されていた勝男さんは次第に学校へ行かなくなり、母親と四人の弟妹を養うために廃品回収業を始めた。その頃の思い出は、米びつの中の雑穀を見て「あと一週間は食べられる」だ。

昭和三十二年、十七歳で単身、島根県から大阪へ。飯場（建築現場で働く作業員のために建てられた住居兼食事を提供する簡易の小屋）に入り、翌日から現場での肉体労働となった。

小学生の頃から父親の仕事を手伝っていた勝男さんには「どういふふうにしてお金を儲けているのか自然とわかった」という。そして、十九歳の時に飯場の親方として独立。これには再び一緒に住み始めていた母親のなんでもやってみたい性格が影響している。「やってみないとわからない」という信条の土台は、どうやら母親にあるようだ。

ある時、隣の飯場の親方の「ガス屋の掘り方に行かへんか」がきっかけとなり、ガス管理設を専門に請け負うようになる。昭和三十年代半ばから高度経済成長期に突入。昼夜を問わず仕事があり、不眠薬の「オールP」は必需品となった。

その頃、縁談はたくさんきた。「母親や兄弟がよいと言えば、女であれば誰でもよい」と思っていたが、「それがいい」という女性（敬子さん）が現われて結婚となった。それまでの縁談は、「あの女は夢見が悪い」という母親の一言で流れたそうだから、余程の縁があるのかもしれない。

「子どもは国も時代も選ぶことはできないし、それ以前に親を選ぶことはできない」と考えてきた木村さんは、生まれてくる子どもに「ようこそ我が家へ」と言いたくて、学歴コンプレックスから学歴をプレゼントしたいと考えるようになる。

二十八歳の時、大阪工大付属高校定時制に入学。「仕事は順調だったし、苦学生ではなくて運転手付きの楽学生だった。自分より若い真面目な先生を誘ってキャバレーに繰り出したこともあった」それでも、同級生五十四人の中で四年後に卒業できたのは、わずか十六人。卒業証書をいただいた時、「身体の中に電流が走った」という。それは何でも飽きやすく三日坊主だった自分が四年間も続けることができたという感動からだ。この継続できた自信がその後の人生を変えていく。

木村さんは目標の立て方が半端じゃない。「人の経験も勉強してみる気はないか。それには本を読むことだ」と友人に教えてもらおうと、「目標千冊」を掲げる。そしてすぐ人に言いつて、後に引けないようにする。まさに有言実行タイプだ。二十年かけて千冊、年間五十冊、一週間で一冊という計算で「薄い本から読み始めたが、初めは眠り薬が入っているかと思つた」と笑う。なんと十八年間で千冊達成。今でも読書の習慣は残っている。



◀木村勝男さん
▼講演会に参加された方々

また、節税のことから不動産を買うようになり、宅建取引主任者受験講座に通い始めた時も、「今度是国家資格を取るぞ」と周囲に広言。そんな頃、